
べたべたツンデレ風味

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

べたべたツンデレ風味

【Nコード】

N0726L

【作者名】

水守中也

【あらすじ】

高純度のデレをお楽しみください

「あ、あんたなんか大っきらいなんだからっ」

「うん。そうだね。いつも言われているから知ってるよ」

あああもおあたしの馬鹿っ。違うの。そうじゃないの。本当は好きなのよ。なのに言えないのっ。

そうあたしはいわゆるツンデレ娘。素直じゃない女。好き好き大好きな彼を前にすると、言葉がつかえちゃうわ、ひねくれちゃうわで、もう大変。

なのに彼ったら、にへらって顔して全然こたえた様子じゃない。憎たらしいったら、ありゃしないわ。

あたしだって、その、す、好きでツンデレになったわけじゃないんだからねっ。……って、ツンデレに対してツンデレってどうするのよっ。

私が好きなのは彼なのっ。あのボケーとしてるところや、細い目とか、小太りなところとか、全部好きなの。けれど言えないの。口に出せないの。心の中ならいくらでも言えるのに。すすすすきすすき……好きなんて、きすを二回続けて言えば言えるのに。言っとくけど、キスって、あっちのキスのことじゃなくって、魚の方だからね。変な想像しないでよ……ばか。

「どうかしたの？ 顔赤いよ」

「あ、あたしの顔が赤かろうが白かろうが、関係ないでしょっ。ちよっと暖房が暑いだけよっ」

でもその、心配してくれて、ありがと。——なんて殊勝な言葉なんて出てこない。ああもお、どうして素直になれないの。あたししたら、あまのじゃくで、ひねくれ者っ。

そのとき突如として閃いた名案。そうだわ。この手があったわ。愛しの彼にあたしは言う。

「今から私の言うことは、全部反対の意味だからねっ」

「えっと、それは今の言葉も入るの？」

「あたしのこのセリフが終わった次から」

「うん。分かった」

よし。おぜん立ては整ったわ。あとはこの思いを口に出すだけ。言える。言えるわ。好きって言う必要はないの。いつも言っている言葉を発するだけでいいんだから。ガンバ、あたし。

「あ、あんたことなんて……」

大きく息を吸う。言っちゃえっ。

「大っ嫌いなんだからーっ！」

なんだからーなんだからーって頭の中でエコーが響き渡る。やった。ついに言った。言えたっ。今まで嫌い嫌いって言っていたおかげだ。ツンデレ、万歳っ。

「へえーそうなんだ。なんか分かる気がする」

え、なによこの反応。このあたしが愛の告白をしたんだから狂喜乱舞するのが当然じゃないの。なんでこんなに余裕なのよっ。もしかして理解していない？

「あの、分かってる？」

「え？」

「嫌いの反対は、その……だから、あれ、あれなのっ」

「うん。好き、だよね」

「そ、そうよ。なのに……」

「で、あんたの反対は、私、だよね」

「え？」

「つまり、今のは『自分のこと大好きなんだから』って意味だよね」
しまったーっ。これじゃただの自意識過剰女じゃないの。あたし
ったらなんて宣言をっ。しかも、分かるような気がするって、どう
いうことよっ。

「そ、そうじゃないのよーーじゃなくて、そうなのよっ」
ああもおやこしいっ。

「いいっ、『私は自分のことが、大っ好きなのよっー!』」
はあはあはあ。言いきったわ。思いつきりナルシストになりきって、言いきってやったわ。すごい。ついにきすじゃなくてすきって言えた。勢いって素晴らしいっ。

「そう……なんだ。はは」

あれ、なのは何よその顔。

あれ？ 待つて。自分の反対はあんたのことだけど、大好きの反対は……って、間違えたーっ。まちがえたーまちがえたー。

「ちょ、ちよっと、違うのよ。じゃなくて、そうなのよっ」

ああもおややこしいっ。

「いいっ。黙って聞きなさい。私は、自分が大っきらいなのよっ」
そうよ。大っきらい。大好きな彼に対して好きって言えない自分なんて嫌い。こんな形でしか態度に示せないなんて、さいてい。

だけど、今度こそ、今度こそ彼に思いが伝わったはず！ あたしは恐る恐る、彼の反応を待つ。

って彼ったら、ウエイトレス（全然美人じゃないわよ。ふんっ）と話をしている、聞いていないじゃない！

「ちょ、ちよっと何してるのよっ」

「何って注文だよ。さっき言ったよね。黙って聞きなさい、って。だから喋って聞かなかったんだよ」

ああああもおなんなのこの男は。アホなの？ バカなの？ でも好きなのっ！

「だからもお。態度で察しなさいよっっ」

彼はうつむいて肩を震わせている。泣いて――じゃなくて笑われているっ。

「な、なんなのよっ。もお！」

「うん。だって、喫茶店でこんな会話していたら、さぞかし周りからバカップルって見られるよなーって」

「べ、別にいいじゃないの。その、カップルってのは、事実なんだ

し……って、カップルって男女二人組み合わせってことで、深い意味はないんだからねっ」

あたしたちが付き合い始めてから、あと四日で、ちょうど一周年になる。

——なによ、なんか文句でもあるの？

ずっと幼なじみで、気にはなっていた。けれど好きって言えなくて。そうしたら彼の方から告白してきてくれた。

「し、仕方ないわね。あんたがどーしても、って言うんなら。付き合ってあげなくもないわ。あたしだって、その、あんたのこと、嫌いじゃないんだからっ」

あたしは冷静を装っていたけれど、家に帰ってからは歓喜のあまり枕を抱いてベッドの上をころころと転がり、彼の名を呟いて抱いた枕に口づけ——って、何を言わせるのよっ。

と、とにかくっ。そんな感じで付き合いはじめたけれど、あたしがこんな性格だから、彼にずっと好きって言えずじまい。このままじゃ彼が愛想尽かしてしまうかもしれないと、毎日ドキドキの日々。だから今日こそは好きって言おうとしたのに。まだできなかった。けれどあきらめないわよ。次こそはきつと……って、別にあんたのために言っただけあげるんじゃないからねっ。勘違いするんじゃないわよ。

「深い意味ないなんて、ひどいなあ」

彼は笑いながらテーブルに身を乗り出し——あたしのおでこに口づけをした。な、な、なんてことをっ。

「でも、そういう素直じゃないところが、好きなんだ」

——っっ！！

「ば、ばかっ。絶対『好き』なんて言っただけじゃないんだからっ！」

(後書き)

5分大祭の前祭作品になります。

お祭りなので、こういう作品もありかなーと投稿しました。
お読みいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0726/>

べたべたツンデレ風味

2010年10月8日14時30分発行